

五月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

河北総合病院

狩野 一男 東京

われといふ古い年男、顔面を強打流血、転んぢやつたよ

救急車がス欠なりとまた別の救急車呼ぶ救急隊員

運ばれて着いたところはてらやまの河北総合病院だつた

救急科で処置受けながら思ふのは寺山修司が逝つた病院

ころびやすく出血しやすい老人になつてしまつてもうおしまひか

春のふすま

田中 愛子 埼玉

パソコンを打つ君の耳さびしくしてしづかに春のふすま閉めたり

ふすま隔てひとりで過ごすまひるまを春の舟人のやうにくつろぐ

記憶力ときにたしめしらなみの（山風）のメンバーの名を言つてみる

生きてたら白寿でしたね壮年の父に告げても詮なきものを

をともものサンダルつつかけ玄関に押しただきぬ夜の速達

トロイカ

原賀 瓊子 東京

（トロイカ）は父の持ち歌トロイカのせんりつ蒼き寒の月光

メモ書きのコシヨをコシヨウに訂正しこころ充たされ買物にゆく

加湿機のフィルターを洗ひセットする手はこはこはと理系のしごと

きさらぎの春めく窓辺あたたかく蛇腹のからだ伸びてゆきたり

草の花夕かたまけて閉ぢてをり慥かに白き小花なりしを

雪を知る

斉藤 梢 宮城

校庭にさしゐる陽射しをかき混ぜて縄跳びをする冬の子供ら

弾むやうな津軽弁にて旧友が宇治十帖まで読みゐるといふ

迷ひつつ買はずに帰り来しゆゑに心に並ぶ陽の色きんかん

「朝の風をペランダに出て確かめる」夫のひと言はわれのひと言

なかぞらを見つめ続けて雪を知る 小指の爪は丁寧に切る

☆

☆



奥村 晃 作* 東京

既成歌壇と若者歌界の分断を繋ぎ止めたりき岡井隆は歌好きの友がら互いに語り合う年齢超えて性別超えて言葉派と非言葉派は先天的区別であつて一目瞭然言葉派の歌人の歌はわたしには解せない歌が結構多い言葉派にあらざる葛原妙子の個性鋭く胸を衝く歌

水島 晴子 兵庫

森 重 香代子 山口

京ふりやさしかりしが猪名の野にかたち滅ぶと柩出でゆく
カウンター席で食事をとるすがたなきかとまたも視線走らす
かじりたいやうな質感たたへたりあをあを大き月が昇れり
黄の蕊をかこみて展きはなびらのくれなゐや無垢ざんくわの花
「はあちゃん」とつね呼びくれき長からぬ姉の一生に「はあちゃん」われは

武田 弘之 神奈川

日 影 康 子 富山

老妻にののしられつつ文を書く今日の私はレフ・トルストイ
こだはりて思へど詮なし四月一日生まれのわれのプラス・マイナス
次々に歌できあがることあれどそのおほよそはよき歌ならず
脱力し脱皮してさらに進みたし九十代の歌詠みわれは
老い耄れの歌詠みなれど今しばしあらしめたまへ会友として

高野 公彦 千葉

影 山 一 男 千葉

江戸川の水面を移る鱗波 寒夕焼の下にうつくし
ペン立てにペン、えんぴつが雑然と並び無言で我に寄り添ふ
源氏にて「鬼々し」とふ語に出会ひプーチンの顔浮かぶたまゆら
匿名で今年もチョコが届きたり土佐の二月のすずめさんより
途中駅にて目が覚めてまた眠るいづこへ向かふ途中か我は

寺庭の満天星に遊ぶ百羽余の雀ら何故か奥庭へ来ず
雪小止む夜を家族らみな出かけ寺の留守居のひとつりに耐ふる
横綱欠け一人大関の大相撲忘れめや令和五年の一月を
去年逝きし夫の命日と享年が宮英子さんと同じ不可思議
亡き夫の遺ししウールの水色の袖無し羽織る戻りの寒さ
をみなにはひたくれなるの生ありと思ふ冬の夜ぬる爛沁みる
〈百年の孤独〉を舐めて偲ぶかな日向の国に逝きし二人を
青島の大会をへて夜の街に目見えたり若き伊藤一彦
『瞑鳥記』の歌人と触れし宮崎の夜深く酔ひてああ若かりき
焼酎を爛して飲みし荒巻さん淡くて長き付き合ひなりき



木畑紀子 京都

無人レジの背後に監視カメラありわれは本当に客であらうか
釣銭を渡し頭を下げレジわれはありがたうございませと一言ひにき
半生は昭和なりしよお湯割り手に喜納昌吉の「花」に聞き入る
いちめんの菜の花の黄にちかづけば小花のひとつひとつが十字花
千歩にて蠟梅、二千歩にて菜の花、五千歩を来て白梅に会ふ

島田暉 神奈川

桑原正紀 東京

せせらぎの音に思考のかき消された歩く人となりて歩ける
からつばの頭は水琴窟にしてきよくひびけり水音、鳥の音
とうめいでこゑ持たぬ風にあふられて草木は大き小さきこゑ上ぐ
陽のひかり追ふ花のごとみなかみへみなかみへ向く脚に従ふ
なつかしきものを嗅ぎあて溯上する魚にかあらむわれのししむら

宮里信輝 神奈川

大松達知* 東京

しづまりてあをく風ぎたる水たちよ「宮ヶ瀬ダム」に堰き止められて
山深くダムに堰かれてゐる水よタービン回し電気つくる水よ
渓谷に日々竣りてゆくコンクリートの「宮ヶ瀬ダム」よ目守りてきたり
雲となり流れゆくもあり山ふかく「宮ヶ瀬ダム」に堰かれたる水
渓谷の川を堰き止めダムつくり電気を産める人間のちからよ

小島ゆかり 東京

田宮朋子 新潟

窓けぶる雪の朝はなまなまとからだのなかに心臓がある
心臓は孤独な臓器 厚着して雪の舗道をひとつづつ行く
トルコ・シリア大地震の映像がよみがへりつつ 雪空に鳥
でき悪き生き物として三センチ雪積む道をびたびたと行く
ああやはり電車遅れて雪の日のホームに並ぶ鴉めく人

計報来しのちの夜更けはもの音の絶えて天華の雪降りしきる
苦楽ありし一生まるごと嘉すること老いの遺影はずやかに笑む
逝くまへに君が託せしUSBメモリーひとつ机上に黙す
亡き人の裡をたづねて『スモール イス ビューティフル』読むけふ三七忌
雪雲の切れ間にのぞくひさかたの空は忘れな草の青色

津金規雄 神奈川

嗚呼われも市内在住高齢者 鎌倉文学館入場無料

亡き友が愛せし洪沢竜彦の「高丘親王航海記」展

客死せし皇子のよはひは六十余 海やまは呼びしかさすらふ魂を

海見ゆる休憩室に身を置けば胸衝く思惟は沖より来たる

大河ドラマ終はりてもなほ騒々し臘梅にほふ鎌倉の街

小山 富紀子 京都

久びさに窓を開くれば瓦照り四温の今朝は雀日和ぞ

立春の机に深く膝を入れ春の花の名ひらがなで書く

常套と言はるる擬音語ひびき良しさらさら春の小川は流る

コロナ禍も災害、戦禍も見ぬふりし觀光誘致の文を書きたり

さくら咲きさくらが咲けばなにもかも良くなるやうな「さくら特集」

清水正子 神奈川

佳き人の夜なべ仕事の干し柿が越より届く いやしけよごと

今年また年取りの夜の膳につく卒寿と米寿むかふるふたり

毛越寺の〈延年の舞の稚兒人形〉この愛しさは何にたぐへむ

暖房のきくりピングで年を越し今朝もちよろりと壁這ふ小蜘蛛

眼病みわれの誤作動またも怒越しの日の斑にかがみ拾はむとしぬ

小嶋 一郎 佐賀

外壁の塗装勧誘けふもまた電話掛かり来見てゐるごとく

長かりし電話に出でて剥きかけの梨のことども忘れてをりぬ

日によりて没り日の思ひ異なると母は言ひつつ頭を垂れてゐき

「風花」の語を知らざれば学童ら「天気雪だ」と騒ぎ過ぎて過ぎつ

市内にて届くは三日後のことと局員は告げ速達勧む

後藤美子 北海道

急速に明るむ空をカーテンの隙間に見つつ紅茶の湯わかす

すみやかに黒き稜線見えて来ぬ窓の水華が朝日にとけて

「また雪が」皆まで言はず視界消ゆ風さへつきて横ざまに降る

終日を吹雪かん外出を控へよとテレビの予報くりかへし言ふ

不要不急ならざる外出あれば目守る出でしままなる暴風雪警報

福士りか 青森

記録的大雪の朝さらさらとひかりはアカシア蜜の明るさ

のつそりと雪を積みたる桜の枝見上げつつ行く博物館へ

一地方都市の小さな博物館サルバドール・ダリの展覧会ひそか

ダリ描く「神曲」の世界まじぶかなる博物館をひとり歩めり

濡れてゐる青と思へりダリの絵をつつみ降りつく晩冬の雪

藤野 早苗 福岡

ニシタチの銘酒居酒屋に遭遇す天尊降臨ヒムカイサーに

高野氏と李禹煥を語りゐる奥田亡羊氏うれしさうなり

後の世の人に評価を委ねるといふ評価ありうたの系譜に

テッペンを過ぎてても冴ゆるひとり居の夜のころは饒舌にして

暖房の部屋に『殺しの短歌史』のページをめくる指がかじかむ

風間 博夫 千葉

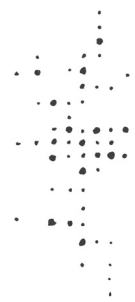
一か所も欠けてはゐないままるく赤暗い色の月を見上げる

ローン組み月々定額の支払ひの苦しくて家族旅行を止めた

習熟に「櫂は三年櫂は三月」難しさうな櫂が三月とは

一本の櫂をギッチラコ船頭が漕ぐギッチラコ渡し舟漕ぐ

みづうみの二本の櫂のボート漕ぐひとつはボクがひとつは君が



橘 芳 園 新 潟

寺、僧に問へとは言はず知りたしといふ人に親鸞全集すすむ
「知は非知に着地す」と説く隆明の三角眉が親鸞に似る
神さまに届く届かぬどつちでもよくて祈ると鑑三言ひき
「戦乱のなかで修行は役立たぬ」野間宏の言葉なれば胸打つ
生きるとは身を証すこと師と友の冤罪の苦を生きし親鸞

水 上 比 呂 美 東 京

わが海より生れしむすめに海ありてその海に在り白きクリオネ
子の子宮うごきはじめて十二週、十三週と月と呼応す
クリオネは半年したらニンゲンの赤子にならむほぎやほぎや泣きて
朝ドラのヒロインみたいデートして結婚式して母になる子は
ひいばばの齢に新米ばばになる初夏青き花の咲くころ

鈴 木 竹 志 愛 知

ペンギンにミーマキャットにカピバラも居る飯田市の動物園は無料
園内に自由に入り見学し癒され帰る無料の動物園
カピバラは三頭をれど隅っこに固まりてみて愛想なしよ
もう少し愛想を見せよとカピバラに文句を言ふは筋違ひならむ
冬の日の動物園の寂しさよ動物たちは寝てばかりゐる

水 上 芙 季 神 奈 川

無防備に置かれた梱包箱のやうひぐれ気たるいわれの身体
下腹部に鼓動する者があるなんて 夜中ざらざら冴えわたる脳
眩しいやうな苦しいやうな眉間なり昏き車内に目を瞑りやり
話さないこと話してしまふこと風知草ゆる身重の夕べ
羊水を飲んでおしっこしてるといふ三寸ほどのわが児おもふよ

大 野 英 子 福 岡

明日からは寒波といふ朝てんくうを蓋したやうな埠頭まで来つ
風く海も空も鉛のいろをして埠頭の鷗の白さきはだつ
吹雪だね ひとこと言ひて仕事の手止めずに耳は風のおと聴く
午後四時の仕事をはりのアラームが鳴りだす二時でをはつたけれど
珈琲を何度もなんども温めて温めなほして飲む寒い部屋

松 尾 祥 子 東 京

あめ色の満月に今宵うさぎゐて卯年の父の笑顔がうかぶ
荒巻さん海老原さん逝きし令和四年また遠くなる宮崎の日々
大寒の産土参り寅年のみどり児青い着物をまともふ
お清めの太鼓どーんと響く中みどり児ねむる寝息を立てて
子の作る鶏手羽中の甘辛煮骨までしゃぶる四歳の子と

鈴 木 千 登 世 山 口

窓の外を雪降りはじめ降り乱る 会へないままに義弟逝きたり
感情のままに放言なす母の老いを羨しくおもふことあり
最後まで家に居たいと母は言ふ動けるうちはここに居たいと言ふ
はしばみの色に褪せたる母の眼に灯ともる話探りては言ふ
卵抱くかたちに石にうづくまる老い猫つつむ二月のひかり

小島 なお* 東京

苺つまんでGoogleレンズ起動する　ひとつ残らず疑問は潰す
占いを信じすぎても、盛大にブルーシートが飛ぶだけの日を
弱音吐くことで増えてく友だちのトルソーめいて平等に抱く
後部座席にかかる花びらが甘えられないなら怒ってみてはって君は
リモコンの散らばる部屋に摩擦して光りはじめた手と手と手

小田部 雅子 静岡

洗ひたる三合の米ピチパチと水吸ふ音の聞こえて、寒夜
棒切れのごとき二月の薔薇の枝の棘と棘との間の芽紅し
古い猫と夫がなにやら会話する声にめざめる春あさほらけ
ポスターの倍賞千恵子、目の皴も顎のたるみもふかぶかと美し
打出の小槌あるがにばらまきあたりしがいよ本腰人れん、増税

詩歌句レッスン ● 小島ゆかり

短歌に「ひふみんアイ」

《新聞転載》

さいきん残念な思いをした、選歌の裏側
をお話しします。

〈日溜りの机に向かへば誰が言ひし机
といふ字枕に似てる〉

「日溜りの机に向かっていたら眠くなっ
てきて、そういうえば誰かが言ってたなあど
思ひ出す。机という字は枕に似てるって」
こんな内容でしよう。なんともおもしろ
い、そして大いに共感できる歌です。ぜひ
とも採りたい思うのですが、原作のままで
はちよつと困ります。どうしたらよいのか、
みなさんも考えてみてください。

まず、「机に向かへば誰が言ひし」と続

くのは少々強引ですね。「思ひ出す」を入
れないと、文脈がつながりません。

①日溜りの机に向かへば思ひ出づ誰が言ひ
し机といふ字枕に似てる

さあたひへん、字余りがすごい。何かを
削らなくてはなりません。「日溜り」は大
事、下句の「机といふ字枕に似てる」も、
変えるわけにはいきません。いっそのこと
「誰が言ひし」を省いたらどうか。

②日溜りの机に向かへば思ひ出づ机といふ
字枕に似てる

なにかしつくりきません。「誰が言ひし」
を省いたために、「机といふ字枕に似てる」
を思ひ出す、となり、これまた妙な文脈に
なってしまう。考えた末の最終案はこ

れ。

③日溜りの机に向かへば思ふこと机といふ
字枕に似てる

わたしの歌であればこう直します。が、
添削して採った場合、作者はたぶん違和感
を覚えるにちがひありません。下句の内容
は自分の言葉ではないのになあと。ここま
での経緯を直接お話しできればよいのです
が、そうもいきません。結局この歌は採ら
ずじまいで、残念でした。

そこで今回の提案です。さいきん話題の
「ひふみんアイ」(加藤の二三棋士が行う、
相手側から将棋の盤面を確認すること)を、
短歌の推敲にもぜひ応用してほしいのです。
つまり、時には選者になつたつもりで歌を
見直してみてください。作者の側からだけ
では気づかなかつたことに、ふと思ひ当た
るかもしれません。